
初めての恋が終わる時

舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めての恋が終わる時

【著者名】

2026

【作者名】

舞

【あらすじ】

この小説は今後更新することはありません。

もし、この話の続きが気になりましたら、「初恋終時・改」をご覧ください。

話の内容はほぼ一緒です。

工藤新一君はある組織に薬を飲まれ、江戸川コナン君の姿になつたらしい。そして、灰原哀ちゃんも元は宮野志保という人でその組織のメンバーやつたらしい。

アタシがこの事実を知つたのは、工藤君が死んだと聞かされた、ある秋の日やつた。

四ヶ月前

平次が「ちょっと東京に行つて来る」と言つて出掛け一ヶ月が経とつとしていた。

「服部、何しに行つたんやうなあ？」

「分からん。電話も繋がらんし・・・自分が受験生やつてこと忘れとるわ絶対！」

平次が東京に行つてから連絡が取れなくなり、和葉は心配で胸が押しつぶされやうだった。

授業中、和葉の携帯が鳴る。

「ひひー授業中はマナーモードにしておなさい。」

先生は怒つていたが、和葉はそんなお構いなしに電話に出た。そ

れが平次専用の着信音たつだから。

「もしもし？ 平次？ あんた何やつてんの！？」

『和葉・・・・・。荷物の用意して東京に来い・・・・・。』

「えつ・・・・？」

和葉が怒りうとしたら、平次が凄く小さな声で言つた。和葉の怒っていた気持ちの一瞬で消えた。平次の声に全く元気がなかつたから・・・。

「どしたん？ なんかあつたん？」

『いいから、東京に来てくれ・・・・。』

「分かつた。」

和葉は早退し、急いで準備をして東京に向かつた。

東京に着いて言われていた住所にたどり着いた。

「工藤つて・・・・・・・・工藤君家?」

ピンポン

「來たか・・・。」

包帯や絆創膏だらけの平次が中から出てきた。

平次

想像以上の平次の元氣の無さと、我に和葉は立ち尽くしてしまつ。

「平次・・・・・いけるん? その怪我。」

「…。」

「藤はもう、帰つて来んのやから……」

平次の表情から、言葉の意味が分かり和葉は黙り込んでしまう。

「ちゃんと制服持つて来たやうな?」

。 お父さんへひこひか、こまひさ

【あと、制服持つて来いよ。】

昨日の電話で平次が制服を持って来いと言つたのは、工藤君のお葬式があるからや・・・。

和葉は新一の姿に驚く・・・。

「ナン君・・・? なんでナン君なん?」

「平次・・・その・・・・・。」

和葉にはなぜ新一ではなく江戸川「ナンが」ここにいるのが分からなかつた。

平次は和葉が何を言おうとしたのかが分かり、話出した。

「「ナンは工藤新一やつたんや・・・。
「・・・・それつてどうじうこと?」

平次の話やと、ナン君と哀ちゃんはある組織の薬で体が小さくなつた工藤新一君と宮野志保さんやつたらしい。そしてその組織を潰そうとしたときに、撃たれて工藤君は亡くなつたらしい。平次はオレのせいやつて言つてた。アタシにはその場の状況が分からんから、なんで平次が自分を責めてるんか分からんかった。やから何も言つてあげれんかった・・・。

「平次・・・・・。」

平次は和葉と目を合わせようとしたしなかつた。

そんな平次の傍で和葉が立ちぬくしていると、哀がやって来た。

「貴方、何があつたか知りたいんじゃない？」

「うん・・・。」

哀ちゃんに導かれる方にアタシは付いて行つた。

和葉と哀は誰もいない静かな場所で話をした。

「工藤君は服部君を庇つて撃たれたの・・・。」「平次を・・・?」

「そう、服部君が奴らに見つかってね・・・。撃たれそうになつたのを工藤君が庇つて・・・。」

「そりやつたんや・・・。」

「彼、撃たれて直ぐに言つてたわ・・・。」

【工藤つ！】

【工藤つ！なんでおれなんか庇うんや！】

【おめえ・・・大事にしなきや・・・いけねえもの・・・ちやんと守
れよ・・・。】

【工藤！】

「きつと工藤君、貴方のこと言つてたのよ・・・。」「

「・・・アタシが電話したからかな・・・?」

「電話？」

「うん・・・。」の前な、蘭ちゃん家に電話したんやけど口ナン君
が出てん。」

【「あんね、和葉ねーちゃん。蘭ねーちゃん今お風呂入つててさ・・・。

・和葉ねーちゃん? どうしたの? 泣いてるの?】

【「ナン君・・・。平次が・・・「お前の考えどる」となんか全然分からんし、知りたいとも思わんわ」つて・・・。】

【平次にーちゃんが、そんなこと・・・。】

【アホやねアタシ・・・。平次がアタシのこと見て無いんなんか前から分かつてたのに・・・。】

【和葉ねーちゃん・・・。】

【「めんな。今日のこと忘れて・・・。】

「アタシが電話で平次のこと言つたから、平次が死なないようひつて・・・。」

「貴方のせいじゃないわよ。彼は彼の意思で服部君を庇つたの・・・。」

「うん・・・。」

誰のせいでも無く、悪いのは撃つた黒の組織。でも和葉は泣き崩れる蘭や、自分を責めてる平次を見て、自分があんな電話をしなければと後悔した。

「あの・・・黒の組織はどうなつたん?」

「警察の力もあつて、崩壊したわ・・・。」

「そつか・・・。」

「でも工藤君の死は大きすぎる代償だつたけどね・・・。」

「・・・・・・・・・。」

蘭ちゃん、平次・・・大丈夫かな? アタシには何が出来るだらつ・・・。

蘭はすつと泣いていた。

新一と最期のお別れをした後も、蘭の涙が止まぬことは無かつた・・・。

「和葉ちゃん・・・。新一いなくなつちゃたよ・・・。コナン君も・・・わたし、独りぼつちだよ・・・。」

「蘭ちゃん・・・。」

今は何を言つても違う気がして・・・。蘭ちゃんに言える事はアタシには何もなかつた・・・。それは平次にも同じだつた・・・。

平次と和葉は蘭の家に泊めてもらつことになつていて。蘭は家に帰ると部屋に閉じこもつて出でこなかつた。平次は蘭の部屋の前に来ていた。

「ねーちゃん・・・。上藤のことやけど・・・。」「何?」「ほんまに悪い・・・。オレがあの時」「謝らないで!・・・。謝つたつて新一は帰つて来ないんだから!・・・。」「そうやな・・・。」

和葉は一人の様子を近くで見ていた。

「蘭ちゃん、話があるんやけど・・・。開けてくれん?」「何?」「

ドアの向ひで蘭が小さな声で言った。

「アタシ、口ナン類と電話で話したねん・・・。」

蘭がドアを開けて和葉に中に入るよήに促した。
和葉は電話の内容を話した。

【あいつ平次に一ちゃん後悔してるよ。ほんとは心配なのに強がつ
ちやつて、そんなこと言つたんだよー。】

【なんで口ナン君は分かるん?】

【オレも一緒だから・・・。】

【へ?】

【オレも強がつてほんとの気持ち言えられてないから・・・。】

「最初は歩美ひやんのこと言つてるやつと黙つてたけど、蘭ひやん

のこと言つたんやね・・・。」

「そんな・・・和葉ひやんが服部類のこと言つたから・・・
だから新一は服部類を庇つて・・・。」

「・・・。」

和葉は電話のことで自分を責めていたから、蘭にしゃづかわぬ何も言
えなくなつた・・・。

「ねえ、和葉ひやん・・・。服部君わたくしよつだい?」

「えつ・・・・・？」

「服部君と付き合つてゐるわけじゃないんでしょう？だつたらわたしに
ちよつだい！」

「そんな・・・・・。」

和葉は黙つてしまつた。蘭が本氣で言つてゐるのか分からぬし、
今の蘭には何を言つても駄目だと思つたから・・・。

平次はアタシのものやないし、付き合つてゐるわけやない。でもアタ
シ、平次が好きやから・・・・・。蘭ちゃんでも嫌や・・・。

和葉は蘭の部屋から逃げるように出でてきた。部屋から出ると平次が
いた。でも和葉は平次と目を合わせずにその場を離れた。

アタシ、何も出来ん・・・・・。

自分が無力過ぎて嫌になつた。

そして大阪に帰る日が來た。その間、蘭は部屋に閉じこもつてて、
平次とも話していなかつた。

和葉と平次も歸つてくるまで黙つていた。だが大阪に着いた時、平
次が口を開いた。

「和葉・・・・・。」

「何・・・・・？」

「オレ、東京に行こうと思つ・・・・・。」

「…………うん…………」

和葉には東京に行くといつ意味が直ぐに分かった。

蘭ちゃんのとこに行くんやね…………。

「直ぐには行かれへんけど……高校卒業したら行く。
「うん…………。」

四か月後

そして平次と過ごす最後の冬はあつという間に過ぎた。

平次は卒業まではいなくて、登校日数に足りたら引っ越すと学校に嘘を吐いていた。卒業証書も一人だけ先に貰い、学園中の誰もが平次の嘘に気付くことはなかつた。

平次はずつと蘭と連絡を取つていて、蘭の元気は平次や園子のお蔭で戻りつつあつた。戻りつつあると言うよりは、吹つ切れた感じで、新一の存在を忘れてしまつてゐるみたいだつた。

それから平次が大阪を離れる日。和葉だけが見送りに來た。

「和葉…………元氣でな? 大学生になつてもあんま夜出歩いたりするなよ?」

「…………。」

「それから」

「平次…………バイバイ…………。」

「おう…………。」

和葉はバイバイとだけ言った。

平次の目を見て、精一杯の笑顔で・・・。

平次好きやつたよ。ずっとずっと平次だけが大好きでした・・・。

この日、和葉の初恋は終わつた。

和葉の言葉の本当の意味を平次が知るのは、一人が再会する五年後の春だつた・・・。

東京では平次は東都大学、蘭と園子が帝丹大学に進学した。

蘭は常に平次と過ごしていて、園子だけでなく帝丹の人は皆新一のことと思い出していた。

あんなに新一君のことが好きだったのに・・・。でも、今新一君のことを蘭に思い出せるときっと蘭は壊れちゃうから・・・。和葉ちゃんには悪いけど、蘭が幸せになれるならわたしはそれでいいの・・・。

蘭と平次は傍から見て凄くお似合いだった。しだいに蘭は平次の事を好きになっていた。平次もそんな蘭に気持ちを返そつとしていた。自分が和葉に惚れていたとも気付かずに・・・。

「平次、今度行きたいところがあるんだけど。」

「ええで、明日でも行くか?」

「ありがと 平次優しいから、好きだよ?」

「そうか? オレも蘭が好きやで。」

平次は蘭が好きなんだと思い込んでいた。

蘭もまた、初めから好きだったのは平次だと思い込んでいた。

その思い込みは思い込みでしかない事に一人は気付かなかつた。

それから一人は互いを求めるよつになつた。自分の歩んでいる道が正しいと思つ為に・・・。蘭は平次だけを好きだと思う為に・・・。

平次は蘭を守ることが新一の為だと思う為に・・・。
そんな間違つた愛は誰が止める事もなく、深い深いところまで墮
ちていった・・・。

「平次・・・愛してるよ?」

「オレも蘭を愛しどる。」

それから毎日が流れたある日、園子の家で蘭があるものを見つける。

「園子、この写真に写っている子たち誰？」

それは蘭と平次、和葉、コナンが写っている写真だった。

「それは・・・・新一君と和葉ちゃんよ・・・・。」

園子は言ひべきか悩んだが、本筋のことを見つた。

「新一・・・・? しんい・・・・? 」

「どうしたの? 蘭? 」

「うめん、園子。用事出来ちゃった・・・・。」

「用事つて? ちょっと蘭! ？」

蘭は走つてある場所に向かつた。

「平次・・・・服部君! ！」

「なんや? 蘭? 今日は園子と買い物行くつて・・・・。」

蘭が急いで来たのは、平次の部屋だった。

「わたし・・・・わたし・・・・。」

「取り敢えず、中入れ。」

突然泣きながら部屋にやつて来た蘭を落ち着かせる。

「どないしたんや？ 落ち着いたら、ゆづくつとええかひひつてみ？」

少し落ち着いたのか蘭がゆづくつと話しだした。

「…………服部君、今までありがとう……。」

「蘭……？」

「もういいの……。ずっとわたしの傍にいてくれてありがとう……。
……でももういいよ？……和葉ちゃんのところに帰つていいよ……。
……わたしは独りじやないつて分かったから、もう一人で生き
ていけるから……。」

「ねーちゃん……。」

「服部君を縛つて」めんなさい……。新一とコナン君が居なくな
なつて、独りぼっちになつちゃつたつて思つて、周りが見えなくな
つて……。和葉ちゃんにまでわたしと同じ思いさせちゃつて……。
。わたしだけが辛いんだつて思つてた。皆辛いのに、わたし、自
分のことばかりで……。ほんとなんて謝つたらいいのか……。
なんてお礼を言えばいいのか……。」

「ねーちゃん……。オレもねーちゃんと屈るんが正解やと思つて、
義務みたいになつてた……。ほんまの気持ちに気付かん振りして
た……。」

「ほんとありがとう、服部君……。」

蘭は笑つた。新一を好きだつた時の笑顔で……。

蘭が新一のことを思い出した時には、もう四度目の冬が来ていた。

「服部君、和葉ちゃんに会いに行かなくていいの？」

「ああ、大学卒業して大阪帰るまではええわ。」

「ちゃんと連絡は取つてるんでしょ？」

「ああ、もちろん……。」

平次は嘘を吐いた。平次が東京に来たあの日以来、和葉とは連絡が取れていなかった。和葉の携帯の番号もアドレスも変わってしまっていた。そして、一年くらい前から和葉の実家の電話番号も変わってしまっていた……。

引っ越しでもしたんやろか？

そして平次も蘭も大学を卒業した。

あの日以来帰つてなかつた大阪に帰つて來た。

取り敢えず荷物を片付けてから一番に向かつたのは、和葉の家……。

ピンポン

「平次君！帰つて來たんやね、おかえり。」

「ただいま、おばちゃん。和葉居る？」

「ああ～和葉今出掛けとるんよ……。」

「こつ戻るか分かる？」

「「「めん、あの子何も言わんと出掛けたから……いつ戻つてくるか、分からんわ……。」

「ほな待たしてもらつてもええかな?」

「「「めんよ、今日お客さん来るから……。」

「そつか……じゃあまた来るわ!」

「「「ごめんね? またね、平次君。」

次の日も和葉の家に行つたが、和葉の母親が出掛けの直前で中に入れてもらえなかつた。

次の日は誰も出なかつたので、合鍵を使うことにした。

「あれ? 開けへん……。鍵変わつとる……。」

和葉の家の鍵は変わつてしまつていた……。

平次は取り敢えず家に帰ろうとして駅に向かつた。

そこで、変わり果てた和葉と再会する。

前から歩いて来る女の子。髪は短くなつていて、おろしていたが和葉だと直ぐに分かつた。隣には和葉が一番仲良くしていた小日向舞がいるのが見えた。

舞が和葉に何かを言って、和葉の傍を離れる。

平次は早く和葉に会いたくて、急いで和葉の元に駆け寄つた。

「和葉・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「よかつた・・・・・。携帯変えたんか？連絡取れんから心配してたんやで？」

「・・・・・・・・・」

和葉は俯いて、返事をしようとしてない。

「おい、和葉。聞いとんか？」

平次が和葉の肩に触れた。

「いやつ・・・・・！」

その途端、和葉が平次の手を振り払つた。それから和葉が震えだしたのが分かつた。

「和葉？」

平次が顔を覗き込もうとしたら、舞が駆け寄つてきた。

「和葉！ いける！ 向！」 つ行！」。

舞が来て安心したのか、和葉の震えが止まった。

「小田向？ わい、和葉どないしたんや？」

舞は何も言わずに和葉を連れて行つた。

「和葉・・・？」

平次は仕方がないから家に帰ることにした。その間も頭の中は和葉のばかり考えていた。

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

「ほい、服部。」

『もしもし？ 小田向やけど・・・あんたに話したいことあんねん。』

『オレも小田向に聞きたいことあるわ。明日会えるか？』

『うん。じゃあ服部ん家行くから。』

「分かった。」

そして次の日、約束の時間に舞が來た。

「服部が聞きたいことって和葉のことやん？」

「おー、お前の話も和葉のことなんか?」

「うそ……。」

舞は平次のいない四年間にあつたことを話しだした。

「東京行つてから和葉と連絡取れんかったやろ？和葉、服部が行つた次の日携帯買い換えてん。

和葉は平次を忘れる為に携帯を換えて連絡を絶つた。平次と連絡を取つてゐるといつまでも忘れられないから。平次は蘭のところに行つてしまつて、もう平次を想うことも出来なくなつてしまつたから。・・。

それからの和葉は元気な振りをしていた。いつも周りに気を使つて、明るく振舞つていた。学校でも家でも・・・。でも平次を好きだつた気持ちはそう簡単には消えなかつた。

そして大学生になり、和葉はある男の人と出会う。大学のサークルの一つ上の先輩で、和葉に優しく接してくれた人。その人と居て和葉も次第に平次への気持ちが薄れていつていて。そして二人が会つてから一年半が経とうとしていた時、和葉はその人から告白される。直ぐに和葉がOKし一人は恋人になつた。

だが和葉は付きあい出して、自分が好きなのは平次だと改めて気付く。そしてその人に別れてほしいと言つた。その人は直ぐに了承して二人は別れた。

それから数日後、和葉の携帯に変な電話が掛かつてくるようになる。

それは次第にエスカレートし、メールや電話だけでなく帰り道に後をつけられたり、隠し撮り写真が送られてくるようになった。和葉は父親に相談し、ストーカーは一時期収まっていた。和葉も携帯を換えたり、一人で帰らないように気をつけていた。

・・・・でもある日な、和葉夜遅くまで飲み会に行つてて、帰り一人やと危ないからつてその人に送つてもらうことになつたらしいんやけど・・・二人きりになつたら急に態度が変わって・・・公園で和葉に・・・。

舞が俯いて話すのを止めた。平次の頭には最悪な事が浮かんでいた。

「・・・・その男に和葉、レイ」

平次が頭に浮かんだ最悪なことを言い掛けたら、舞に泣きそうな顔で睨まれた。

「偶然通り掛かつた人が助けてくれて、未遂やつた・・・。」

「・・・・・・。」

「そいつは直ぐ警察捕まつたよ。でも和葉その日以来、男が駄目になつた・・・。」

「和葉、ストーカー始まった時から人を恐がるようになつてて、でもそいつだけは大丈夫で相談とか乗つてもらつてたみたいで……でも、そいつがストーカーやって……。」

平次は顔を伏せて聞いていた。

「今は誰かと一緒に外にも出られるようになつてる。やから、服部にお願いがあつて来た。」

「なんや?」

平次は舞の言おうとしていることが分かつていて。

「もひ、和葉に関わらんとしてほしい。」

「・・・・・・・・・・・。」

「お願い・・・・和葉やつと外に出られるようになつたんよ。もひ辛いこと思い出してほしくない・・・。」

舞の悲痛な願いは平次にもよく分かつた。でも平次は首を縦には振らなかつた。

「・・・・・・・・・・・。」

「分かつた・・・。服部がつんつて言わんのなら、うちが和葉に会えんようにする。」

「小日向つ!」

帰ろうとした舞を平次が掴んだ。

「触んな・・・！」

「小日向、オレが和葉をもとに戻す！やから和葉に会わせてくれー！」

「・・・。」

舞は何も言わずに平次の家を出てきた。残された平次は和葉のことを考えていた。

どうしたら、昔の和葉に戻るのだろう・・・？

和葉の連絡先もわからないし、会いに行つても会わせてもらえないだろう・・・。

でも、時間が掛かっても、和葉を昔の和葉に戻してやる・・・。

「和葉、暫くうちに泊まらん?」

「舞ん家に?」

「そう! 和葉と話したいこととかこいつはあるし、ついに泊まつに
おこで!」

舞は平次が和葉の家に押しかけてもいけぬついに、自分の家に泊ま
らせようとしていた。

「でも・・・・・。」

「じゃあ・・・・うちが泊りに来ちゃ駄目かな?」

「・・・それならええよ。」

「じゃあ決定! 明日からお世話になりますわね。やんたり言
つてくれるな!」

舞・・・平次が帰つて來たからアタシの傍に居つてくれるつもりな
んかな? そんなに心配せんでも、アタシと平次はもう会つことがあるともな
いよ・・・。

和葉は平次が自分に会いたいと思つてゐるなんて、思いもしなかつ
た。

次の日の朝早くから舞は和葉の家に來ていた。その日の夕方、和葉
の家に誰かがやつて來た。和葉には玄関に近寄らないようになつて、
舞が出た。玄関の前に立つてゐたのは平次だった。

「服部、和葉には関わらんとつてほしうつて、ちやんと書いたよな
？」

「ああ・・・・そやけど、和葉に」

「和葉はあんたの顔なんか見たくないつて！」

「・・・・・・・・・・・・」

「分かつたらさつさと帰つて！！」

「舞う？どしたんさつきから大きい声出し・・・・・・」

舞の大きな声が気になつて和葉が玄関に来た。

「「和葉・・・・・・・・」」

「・・・なんや平次やつたん？」

和葉は笑顔で言つたつもりだつたが、声は震えているし、顔も強張つていた。

平次に自分が男が駄目だとばれないように演技したつもりだつたが、逆に平次に昨日の舞の話が事実なのだと思わせていた。

「・・・・・オレ、用事思い出したから帰るわ・・・・」

舞はまた平次を泣きそうな顔で睨んでいた。でも和葉に悟られないように、明るい演技をした。

「そつかそつか、服部用事あるんか。ほなね」

「おつ・・・・・」

和葉、ほんまに男が恐いんか・・・。オレに何が出来るだろ？

蘭は大阪に来ていた。和葉に会つて、直接謝る為に和葉の家に向かつた。

和葉の母親に、頼んで一入きりにしてもらい。

「『めんなさい』……。和葉ちゃんにはほんとに最低なことしたつて思つてる……。『めんなさい』って言葉じや全然謝りきれないけど……。」

「それで髪切つたん……？」

蘭は長かつた髪をバツサリ切つて、ショートヘアにしていた。

「うん。でも『んな』とで許してもらおうとは思つてない……。でも服部君だけは嫌いにならないで……。お願い……。」
「別に平次のことは嫌いやないよ……。それに平次が蘭ちゃんを選んだんや……。蘭ちゃんが謝ることないよ……。」

和葉は蘭の方を見ないで言つた。

「わたしが服部君をちょうだいって言つたから……。服部君はわたしのところに来たの。服部君、ほんとはずつと和葉ちゃんだけが好きだつたんだよ……。」

「ごめん、そんなん信じれんわ……。」

「和葉ちゃん……お願い、服部君を」

「ちよお、あんた誰や？」

舞が仕事から帰つて來た。

「毛利蘭です。」

「あなたが蘭ちゃん？・・・もう和葉に会いに来んとつてー。」

「舞・・・・・。」

「「めんなさい・・・。」

「謝りんとええから帰つてーー。」

蘭は舞に追い返されてしまった。

「舞、アタシ大丈夫やで？」

「嘘吐かんとつてよ・・・。だつたらなんで和葉笑わんの？」

「・・・・・舞も嘘吐いてるやん・・・。ほんまは泣きたいのに泣かんやん・・・。」

舞はいつも思つてた、どうして和葉なんだろうって・・・。アイツだつたら、うちだつたら良かつたのに・・・。なんで和葉ばつか傷付かなあかんの・・・?なんで「ちば」んなにも無力なん・・・?
和葉もいつも思つてた、舞が泣けないのは自分のせいだと・・・。いつもアタシを一番に考えてくれてると、泣くことすら出来ないようにしてしまつている・・・。アタシがもつと強くなれたら・・・。
・。

「舞、泣いてもええよ?今までアタシの方が辛いと思つて泣けんかつたんやろ?」

「和葉・・・なんも出来んと「めんな」?」

「舞はいつもアタシのこと考えてくれてるやん。」

和葉は舞の手をとつた。一人は久しぶりに涙を流した。

舞と一緒に泣いた。気がつけば、あの日“平次が蘭ちゃんを選んで東京に行つた日”以来泣いていなかつた。平次が居なくなつて辛くて、悲しかつた。

それから、信頼していた人にあんなことをされて……アタシの心は壊れてしまつた。涙なんか出なくて、もう何も考へたくなかつた。

泣いたつて現実は変わらないのだから……。周りを心配させて、自分も余計に惨めになるだけだから……。

だからアタシは泣くのを止めた。泣いて終わるなりいくらでも泣くのに……。

でも過去に戻りたいとは思わない。過去に戻つてもアタシが変わらなきやきっと今と同じ未来に進んでしまうから……。

でもこのままは嫌や。もつと強くなりたいよ。

／＼＼＼＼

暫くして、電話が鳴つていてことに気がついた。

「つかが出るな？」

舞が代わりに出てくれた。

ピンポーン

誰かが家に来る。

「びひしょ、舞は電話しよるし……。

「アタシ、出でくる……。」

「和葉、ちょっと待つた。」

「大丈夫やつて！」

でも一応先に誰か確認しよう。

ドアの向こうには平次が立つていた。

「平次……。」

ピンポーン

「はーい……。」

「和葉……あ、えつと……。」

平次は和葉が出て来てくれるとは思つてなかつた。話そつと思つて
いたことが全部飛んで頭が真つ白になる。

「どしたん？」

「えつと……。」

平次が頭をかうと手をあげたら、和葉がビクつとなつた。

「え……？」

平次は手を後ろに回した。

「小日向から全部聞いたんや。。。和葉の事。。。」

「そ、う・・・・・。」

和葉は平次に顔を見られたくなくて、俯いた。

「和葉・・・電話番号教えてくれへんか?」

「へ・・・・・?」

平次を見上げる。急に見られて平次の顔が赤くなる。

「和葉の連絡先教えて欲しい。」

「分かった・・・。ちょっと待つと、携帯取つて来る。」

それから平次の番号とアドレスも教えてもらつた。平次が凄く嬉しそうな顔をして、和葉は戸惑つた。

「じゃあ今日は帰るわ。」

平次は言いたかったことは何一つ言えなかつたけど、和葉の連絡先を聞けて上機嫌だつた。

部屋に戻ると、舞はまだ電話をしていた。

「和葉、お客さん誰やつた?男ちゃうかつた?」
「女人やつたよ。なんか押し売りやつた。」

舞には嘘吐きたくなつたけど、心配するから平次のことは内緒にした。

その日の夜、平次から電話があった。

『和葉、ねーちゃんのことやけど・・・責めんといてくれな?』

「平次も蘭ちゃんも、おんなじこと言つんやね・・・。」

『ねーちゃんが?』

「うん。やっぱ恋人やもんね・・・。」

『ねーちゃんとは別れた。ちゅーかあれは付き合つてないかな・・・。』

『・・・・・・・・・。』

和葉は何も言わなかつた。

『オレはずつと和葉が好きやつた。』

「・・・・・・・・。」

『和葉もオレのこと好いてくれてたつて聞いたで?』

「・・・・・・・・・。」

『やからオレと付き合』

「何言よるん?・・・・平次やん、蘭ちゃん選んで東京行つたん平次やん!...今更、好きとか言われても迷惑やーー!」

それだけ言つと和葉は電話を切つた。

蘭は追い返された後、平次の元を訪れていた。

「ねーちゃん！？ どないしてん、 その髪！
「ちょっとね、 気分転換」

蘭は笑いながら短くなつた髪を触つた。

「・・・・・ 和葉に会いに来たんか？」
「うん。 でも和葉ちゃんの親友に追い返されちゃつた・・・。」
「小日向か・・・。」
「彼女、泣きそうな目でわたしのこと睨んできた。わたしのせいで
傷付いてる人が何人いるだろ？ ほんとに、わたし・・・。」
「ねーちゃん・・・。」
「大丈夫よ。わたしは泣かない。わたしには、泣く権利なんかない
んだから・・・。」
「・・・・・・・・・。」

平次は蘭のせいだとは思つてないけど、自分を責める蘭に何も言え
なかつた。

わたし、取り返しのつかないことしちやつたけど、もし神様がわた
しを許してくれるなら・・・ 和葉ちゃんと服部君を幸せにしてくだ
さい・・・・。わたしはどんな罰でも受けるから・・・ だから和葉
ちゃんと服部君だけは、お願ひします。

二人で泣いた日から和葉の元気が無い事に舞は気付いていた。でも和葉に聞いても疲れとるだけだと言つてほんとのことを言つてくれなかつた。

}{ }{ }{ }{ }

「和葉、携帯鳴つてん？」

舞が携帯を見ると、服部平次と表示が出ていた。

なんで服部？和葉、服部にいつ翻譯教えたんやろ？

「和葉、電話鳴ってるって！」

和葉は携帯に平次の名前が表示されてるのを見ると、電話を切った。

「出んでいいん?・・・朋部やN?」

לען ע. • • • •

舞はそれ以上何も言えなかつた。和葉はまだ平次を好きかも知れな

和葉が一番苦しい思いをしているのに、自分は何も出来なかつた。

でもアイツなら・・・アイツなら和葉を救えるかも・・・。

平次のところに舞が来た。

「服部、お願いがあるんやけど・・・。」

「・・・もう和葉に構うなつて?」

平次は舞に言われそうなことを先に言つた。

「ちやう、和葉を・・・和葉を笑顔にして・・・?」

「小日向・・・。」

「あんた言つたやん!オレが和葉をもとに戻すつてーだつたら和葉を笑顔にしてよ!」

「落ち着け、小日向。」

「・・・お願い・・・。うかじや駄目なんよ・・・。でも服部なら・・・。」

「オレが和葉に笑顔を戻したる。」

小日向はオレが凄く嫌いなはずや。オレが居らん四年間、和葉を支えてきたんは小日向やから・・・。でも小日向はオレを頼つて來た。きつとオレなんかに頼るのは凄く嫌やつたと思う。どんな思いでオレにお願いつて言つたやろ・・・。それを思つと胸が痛んだ。

オレのせいで、和葉やねーちゃん、小日向まで傷付けてる・・・。でもオレは自分の気持ちばかりで、和葉と居りたいと思つとる。。。こんな我儘、誰も許してくれないだろ?・・・。でもオレは誰が邪魔しても、和葉を笑顔にする。

平次は和葉の家に来た。和葉は玄関まで来たが、平次だと分かつて開けるのを止めた。でも平次にドアを開けられてしまった。

「平次……」めん。今舞居らんし、帰つて……。」

和葉は平次と目を合わせようとしたしなかつた。

「和葉……お前がオレを嫌いでも、恐くても、オレは和葉が好きやから……。」

「……やから迷惑なんよー。」

和葉はドアを閉めた。

なんで……なんでドキドキしとるやろ?アタシ、まだ平次が好きなん?

そんなはずない……それに平次は蘭ちゃんと……。

和葉は自分の心に戸惑いを感じていた。

それから和葉は誰かが来ても玄関には近寄らないようにしていった。平次からの電話もメールも無視していた。

~~~~~

でもそんな時、和葉の家の電話が鳴った。

「舞、出て……。」

「うん。・・・もしもし?おじさん?・・・えつー?分かった。」

「お父ちゃんやった?」

「うん。なんか服部、怪我して病院運ばれたって。」

「えつ・・・!?」

「和葉、行く?・・・あつー!今から仕事あるんやつた。」めん  
もつ行かな!」

「うん。いつてらっしゃい。」

平次が病院に・・・。大丈夫なんかな?

びひょひつて悩む?ともなく、家を飛び出していた。

何も考えずに、病院まで急いだ。聞いた平次の病室の扉を開けると大滝と数人の刑事らしき人がいた。この中で和葉の事情を知つてるのは、大滝だけ。

「和葉ちゃん・・・へえちゃんは今眠つとるよ。もう直ぐ目覚ますと思うから、居つたつてくれ。」

「うん・・・。」

「じゃあおれたちは外であるが。」

大滝は他の刑事を外に出してくれた。和葉はベッドの傍に会つた椅子を離れたところに置いて、座る。

少しすると、平次が目覚めた。

「・・・和葉・・・？」

「えつと・・・いける?」

「ああ、ちょっと刺されただけやから・・・。それより和葉一人で来たんか?」

「うん。」

【今は誰かと一緒に外にも出られないよくなつてゐる。】

舞の言葉を思い出した。

確か一人は無理やつて・・・。オレのこと心配して来てくれたんやろか?

そう思つと自然と顔が緩む。

「一人で恐くなかったか？」

「・・・外に出るん恐いよ？でも、なんでやろ？平次が心配で・・・。  
。氣がついたら、病院に来てた・・・。」

俯いて話していく気付かなかつたが、人の気配が近くでして顔を上げると、田の前に平次がいた。

「平次・・・近いよ・・・。」

そう言つたのに、平次はもっと近づいてきた。  
そして、抱きしめられた・・・。

「いやつ……離して……」

平次を突き飛ばした。和葉が顔を見ると、平次が落ち込んでいるよう見えた。

「『めん……。頭では分かつとるんよ。男の人が皆そおいつことするわけやないつて。平次は幼馴染やし、大丈夫なはずやのに……恐くて……。どうしたらいいんか分からん。』

「和葉……。」

泣き出した和葉の手を、平次は自分の手で包んだ。

「……？」

「ちょっととずつでええから、オレに慣れてほしい。」

和葉は小さく頷いた。

「和葉、来てくれてありがとな。」

「ううん。怪我酷くなくて安心した。」

和葉の頭をポンポンと優しく撫でる。

「帰りは小日向に迎えに来てもうえよっ。」

「ううん。一人で大丈夫やよ。」

「あかんやろ……！」

言つてから大きな声を出してしまつたことに気がついた。和葉は少し怯えた顔をしていた。

「すまん……。でも心配やから、小田向に迎えに来てもうつてくれ。」

「……うん……。」

舞は仕事中やつたから迎えに来てくれるまで結構時間があつて……。

平次と一人きりなのは凄く……なんて言つんやろ……疲れてしまた。恐いって気持ちが無いつて言つたら嘘やけど、そんなんよりもっと違う感情があつて凄い疲れた。

「……平次。あの……手え……。」

「あつ……すまん……。」

平次はすっと包んでいた和葉の手を放した。

平次がずっとアタシに氣つかつてて、それが分かつて辛くなつた。昔みたいに普通してくれたええのに……。でもアタシが出来んようにさせてるんよね……。

やうしだらもつと普通に出来るやう?もつと前みたいに・・・。

初めて、平次と居ることに苦痛を感じた・・・。

「舞、『』めんな？」

和葉は舞に病院まで迎えに来てもらつたことを謝つた。

「謝らんでもえつて！・・・でもびっくりしたなあ。和葉が一人で出て行つてたなんて。」

「なんか、気がついたら病院まで来てて・・・。」

「服部のことが気になつた？」

「・・・分からん・・・。」

和葉は少しだけ悲しそうな顔をした。

「平次に好きやつて言われてん。前の・・高校生の時のアタシやつたら、凄く凄く嬉しかつたと思つ。でも今は・・・よう分からん。」

「じゃあゆつくり考えたらええよ。服部は和葉の事待つてくれれるよ、きつと。」

「うん・・・・・。」

「和葉、『』は何があつても和葉の味方やからな？」

「ありがと『』。」

舞が突然言い出した。

「和葉、今日服部のお見舞い行かへん?」

平次のところに行ひつて・・・。

「えつ・・・・・?」

「和葉が嫌やつたらいいけど。」

急にじしたんやろ? 平次を遠ざけてたのに・・・。

「・・・・・・舞、平次となんかあつた?」

「なんかつてじうこいつ?」

「なんて言つたか・・・舞つて平次の事嫌いやつたよな?」

「ああ、今でも大嫌いやで? でも・・・。」

和葉に笑顔になつてほしいから・・・。

「でも、何?」

「内緒・・・・・和葉、うちと服部の関係が気になる?」

「なつ・・・気にならんよーー!」

嘘や。平次と舞の「こと気になる・・・。

でもこの時のアタシは、平次が気になるんやなくて、舞が気になるんやと意地を張つていたのかもしねい・・・。



「結局来てしもた……。」

舞に言われて、病院まで来てしまった。舞は病院までは一緒に来て  
くれたけど、適当に時間潰していくと言つて、行つてしまつし……。

平次とは会いたいって気持つより、会いたくないって気持ちが大き  
かつた。

「どうしよ……。」

病室の前で暫く立つてた。

「でも折角来たのに会わずに帰つちやうんは駄目やね。」

そのまま自分に言い聞かせて、和葉は病室に入った。

「平次、いてる……？」

「和葉、来てくれたんや。おおきい。」

「……別に舞が行こうつて言つたから、来ただけや。」

なんでこんな可愛げの無い言い方しか出来んのやろ？

「それでも来てくれたから、ありがと。」

平次が嬉しそうな顔で笑つから、和葉はどんな顔をしたらいいか分  
からなくなつた。

「やつぱ帰る……。」

「ちよお待つた……。オレと廻るとしどどー。」  
帰らうとした和葉を呼び止めた。

「えつ・・・・?」

「前來てくれた時、和葉辛そうな顔しどつたから……。」

「それは・・・・・平次が氣い遣つてるから。」

平次がベッドから降りようとしたら、和葉は逃げるよつて、ドアに  
近づいた。

「和葉。近づかんから、触つたりせんから、帰らんとつてくれ。」  
「やから・・・・・・・それが嫌なんよ・・・・。」

和葉は泣き出して病室を出て行つてしまつた。

平次は泣いて出て行つた和葉を追いかけることが出来なかつた。

「どうしたらええんや・・・。」

平次には和葉がなぜ泣いたのか、分からなかつた。  
やつぱりオレと会つのも嫌なんやろか？

「ンンン

「和葉、そろそろ帰・・・・服部、和葉は？」

舞が和葉を迎えてきた。

「小日向？和葉に会つてないんか！？」  
「うん？会つてないで？」  
「和葉、来て直ぐに出て行つてしまつて・・・」  
「えつ！？なんで！？」  
「分からんけど、泣き出してもい。」  
「あんた、和葉泣かせたん！？」  
「・・・・・・・・・。」

平次は舞から田を逸らした。

「・・・まさか和葉にやらしい」としたんや無いやろな！？  
「アホ！…そんなことするか・・・。それより和葉に電話してみて

くれ。」

舞が電話をしたら、和葉はもう家に帰っていた。

「じゃあ和葉泣かせた訳を聞かせてもらおうか？」

「…………和葉に近づかんから、触つたりせんから、帰らんとつてくれ。つて言つたら……それが嫌なんよつて泣き出して……」

「その前は何か言つてた？」

「オレと居る時辛うな顔しとるつて言つたら、オレが氣い遣つてるからつて。」

「うへん。分からん……。単に服部が嫌なだけやつたりして？」

なんとなく舞には和葉の気持ちが分かつたけど、平次には誤魔化していた。これは二人の問題だから……。

「なんやと……」

「冗談やつて。たぶん和葉は服部のこと……やつぱ調子に乗るから言わんと」

「はあ？ なんやそれ？」

「じゃあ和葉家に居るか確かめたいから、帰るわ。」

## 25 (前書き)

書くの忘れてたけど、平次は刑事さんです。  
先輩の川口さんは東京の人で、新一に雰囲気が似ています。  
平次が一番慕っている先輩です。

舞が帰つた後、平次は一人考えていた。和葉が泣いた訳を…。

「触らんつて言つて、それが嫌なんよつて言つたけど……才  
レに触つてほしつて訳や無いわな……。そんな都合良く考えた  
らあかんわ……。それとオレが氣い遣つてるつて言よつたけど、  
氣い遣つてるわけや無いんやけどな……。じゃあなんで」

「服部? さつきから俺がいるの氣付いてないのつてねやと?」

声を掛けられて氣付いたが、先輩の川口が来ていた。

「川口さん! いつから居つたんですか! ?」

「触らんつて言つて……あたりから?」

川口は笑いながら言つた。

「最初からやなですか! 来てたなら声掛けくださいよ!」

「なんか真剣な顔してぶつぶつ言つてるから、声掛けいいのか分  
かんなくつてさ。……どう? 何を言つてたんだ? 彼女となんかあつ  
たのか?」

「まだ彼女やないですよ……。」

「まだつてことは、いずれは彼女になるんだ?」

また川口は意地悪な笑顔で言つた。

「オレはもうしたいんですけど……向こうは全然……。」

「片思いなんだ?」

「はい。今日も泣かせてしまつ……。ほんま何やつてんやろ……。」

。。」

「でもその辺思いの子はお前に本音で接してくれてるんじゃないかな。  
嫌いだつたり、どうでもいい奴の前じゃ泣かないよ。泣くつてことは、お前に心を許してるんだよ。」

「そんなんですかね？最近はアイツの泣き顔しか見て無い気がして。。。」

「じゃあお前が笑顔にしてやれ。」

「オレもそつしたいんですけど。。。」

「何弱気になつてんだよ？服部らしくねえぞーー！」

「そうですね。オレ、頑張りますわー！」

平次は川口の言葉でまた前向きになつた。

舞は和葉の家に帰つて來た。

「和葉、勝手に帰つたら心配するやう?」

「「じめん・・・。平次とちよつと・・・。」

和葉は氣まずやうにした。

「「うちはええけど。服部が和葉のこと心配してたで?」

「「うん。・・・。勝手に泣いてもたし、今度平次に会つた時どうしよう?」

「なんで泣いたか話してみたら? 和葉の気持ちを服部に話すん。」

「「うん。・・・。」

「「そうやー、もう和葉の家で居るん止めるわ。」

「「なんで?」

「最初は和葉と服部が会わんよつて面のつもつやつたけど、和葉が服部に会いたいみたいやし。」

舞はからかうように笑いながら言つた。

「アタシ、別に平次に会いたくなんか・・・。」

「でもさつき今度平次に会つたらつて言つてたで? 会いたくなかつたら、会わんよつて出来るやう?」

「それは・・・。」

「和葉のことは服部に任せたんだから。うちの役目はこれでおしまい。」

「別に平次のことは」

## ピンポン

「誰か来たな。もしかして服部やつたりして？」

「そんなわけないやん。平次は病院やから。」

舞に言われて、玄関に行つて驚いた。ほんまに平次が来ていたから。  
・・。

「 よお・・・。」

「 うん。・・・・・ 病院は? 」

「 抜けてきた。」

「 大丈夫なん? 」

「 まあ、 いけるやろ。 それよりオレは和葉が泣いた訳の方が気に入る。」

「 えつと・・・・・ それは・・・・。」

和葉は俯いて訳を話そいつとしない。

「 オレが嫌やつた? でもお見舞い来ててくれたってことは、 嫌ではないよな? 」

「 ・・・・・ アタシに気遣つてる平次は嫌や・・・。 もつと昔みたいに」

「 昔みたいにするんは無理や。」

和葉の言葉を遮つて、 無理だと言つた。 和葉は泣き出しそうな顔を平次に向けた。

「 なんでなん? 」

「 和葉が好きやからや。 ただの幼馴染みみたいには出来ん。」

少し和葉の顔が赤くなつた気がした。

「 ・・・・・ アタシは・・・ 平次のこと・・・・・ す」

「 和葉へ うち帰るな? ・・・ なんや服部居つたん? 」

言い掛けたところで、舞がやつて來た。

「居つたわ！…ちょお小口向、！」つち来い！」

「なんやの？」

和葉から聞こえないところに舞を呼んだ。

「今和葉がオレをどう思つとるか言い掛けたのに…お前来んなよな！」

「ワザとに決まつてゐやろ？今の和葉がアンタの事好きな訳ないで？」

「それは…・・・そやけど…・・・」

「取り敢えず今は、和葉に嫌われんように頑張れば？」

「お前、オレの事応援してくれるんか？」

「別に…・・・アンタの事は認めて無いからなー」これは和葉の為やねん…・・・。」

「小口向は素直やないなあ。」

平次が嬉しそうに笑うから、舞は寒気がした。

「こつち見て笑うな！きしょく悪い…・・・。」

「平次？舞？一人で何話してんの？」

和葉が一人が気になつて近寄つて來た。

「なんでもないで？じゃあうち帰るし、一人はいつまでも玄関に居らんと中入れば？」

「そうやね…・・・。じゃあ舞、またね。」

和葉が舞らの名前を呼ぶとき、先に平次を呼んだことを舞は嬉しく

思つ  
た。

和葉から少し離れたところに平次は座った。

「なあ？ 今度一人でどつか行かへん？」

「どつか？」

「うん。まああれや・・・『デートや／＼』

平次は少し赤くなつた顔を隠す為に、そっぽを向いた。

「ええよ。何処行くん？」

「和葉の行きたいとこ、何処でも連れつてたる！」

「じゃあ考えとく。」

それから暫くして平次も退院し、一人は新しく出来たショッピングモールに行くことになった。

今日の天気は晴れ、絶好の『デート日和』。まあ建物の中だから天気は関係ないのだが・・・。

平次は朝から機嫌が良かつた。和葉も上機嫌の平次につられてなのが、今日はいつもより元気だった。

楽しいと時間が過ぎるのがあつという間に感じて、時計を見るともう七時だった。

「そろそろ帰るか？」

「うん。」

外に出ると土砂降りの雨が降っていた。

「うわ・・・めっちゃ雨降つとるやん・・・。」

「傘買おつか?」

「そりやな・・・。」

だが突然の雨のせいで傘は売り切れていた。バスで来た二人は、バス停まで走ることにした。

「ほい。」

平次が手を差し出して、和葉は?を浮かべた。

「お前鈍くさいしな・・・手えつないだるわーー

「・・・ありがと。」

単に手が繋ぎたかっただけの平次の手に、和葉は笑顔で手を重ねた。

和葉がやっと笑ってくれた・・。嬉しくて今直ぐ抱きしめたくなつたが、逃げられたら困るから我慢した。

取り敢えずバスに乗れて、家の近くまでは帰つて来れた。

「問題はここからやな・・・。」

「うん。ここから、全く屋根ないもんね・・・。」

「さつきより雨酷くなつとるし・・・。和葉、走れるか?」

「うん。大丈夫やで。」

一人は手を繋いで、雨の中に飛び出した。



何とか和葉の家に着いたが、二人ともびしょ濡れになっていた。和葉のブラウスは透けて、下着が見えてしまっている。オレは見ないようにと、心の中で自分に言い聞かせていました。

「じゃあ直ぐに風呂入って温かくしとけよ？」

「…………待つて…………平次も…………」

帰ろうとしたら、和葉が抱きついてきた。

濡れているせいで、密着度が増す。背中に和葉の温もりを感じたが、それはしだいに熱へと変わった。

「…………。」「…………。」

和葉の手をほどいて向き合つた。

和葉が目を逸らすより先に平次の唇が和葉に重なる。優しいキスから、激しいキスへ……。オレの強引なキスにも和葉は応えてくれた。

それに気をよくしたオレは、首筋や鎖骨にもキスをした。ブラウスのボタンに手をかける。時々聞こえる和葉の甘い声がオレの理性を飛ばした。

「…………へえ…………。」

でもオレに触れていた和葉の手が微かに震えているのが分かつた。

和葉の顔を見るが、オレははっとして行為を止めた。

「すまん……。」

謝る」としか出来なくて、でも和葉の顔は見れなかった。

30 (前書き)

29 の和葉視点

家に着いた頃には、一人ともびしょ濡れやつた。

「じゃあ直ぐに風呂入つて温かくしとけよ?」

「・・・待つて・・・平次も・・・」

帰ろうとした平次に抱きついた。なんで抱きついてしまったんかは自分でも分からんかった。ただこのまま平次を帰したくなくて・・・。

濡れているからなのか、平次との距離が凄く近く感じた。

「・・・。」  
「・・・。」  
「・・・。」

沈黙を破ったのは平次の行動。アタシの手をほどいて、向き合つた。目を逸らさうとした時には、もう平次の唇がアタシのに重なつていた。

「・・・つ・・・ん・・・。」

平次の強引なキスにアタシは何も考えられなくなつた。

それから平次が触れるところが熱くなつていくのが分かつた。

でも平次なのに、平次がしてくれているのに・・・平次に重なつてあの人を見えた。

そしたら、平次と目が合つた。目が合つた平次は、「すまん・・・

。」と呟つてアタシから田を逸りして行為を止めた。

「なんで・・? なんで止めるん?・・・・・蘭ちゃんとはしたの?」  
アタシとは出来んの?」

「ちがつ・・・。」

「もういいよ・・・。」

アタシは悲しくなつて涙が出てきた。

「・・・・お前がそんな顔するからやべー。」

でも泣き出したアタシを宥めるにもなく、平次は怒鳴った。

「お前がそんな・・・そんな怯えた顔するから・・・。」

「・・・・」め

「風呂入つて・・温かくしとけよ・・・。」

謝りうとじたアタシの言葉を遮つてやつと、平次は傘を持たず  
に出て行つてしまつた・・・。

平次の事傷付けた・・・。アタシが平次を恐がつたから・・・。でも平次が恐かつたわけやない、あの人にされたことを思い出してしまつたから・・・。

平次とあの人は違う、分かつてゐるのに・・・。

外を見ると雨は強くなつていて、止む氣配も無かつた。

「平次・・・。」

平次に触れられて熱くなつていた体も直ぐに冷えてしまつた。

平次が心配やつたけど、追いかける勇氣はアタシにはなくて、言われた通りお風呂に入る事にした。

平次が途中まで外していたブラウスのボタンをはずす。

首のどこが赤くなつているのが見えた。平次のつけた痕。

その人につけられた時は消えるまで気持ち悪くて仕方なかつたのに、平次のつけた痕は見るだけでドキドキして苦しかつた。

アタシ、また平次のことが好きになつてもたん?

平次は雨の中を走り出すと同時に歩き出した。

和葉に触れて熱くなつていた体を、雨が冷ましてくれた。

泣かせた上に怒鳴つてしまふなんて……。ほんま最低や……。

折角今日やつと笑つてくれたのに……。あの時嬉しくて、もつと見たいつて思つたのに……。

和葉がキスにこたえてくれて、嬉しくて調子に乗り過ぎた。怯えて当然やろ……。

でも止めた時に言つた和葉の言葉が頭の中で何度も繰り返された。

【蘭ちゃんとはしたのに、アタシとは出来んの?】

確かにオレは蘭ちゃんと関係をもつた。何度も何度も蘭ちゃんがオレを求めるたびに、それに応えてきた。その時はそうするのが正しいことだと思っていた。いや、正しいと思いたかっただけかもしれない。蘭ちゃんもオレも間違いに気付こうとしていなかつた。でも蘭ちゃんを抱いた後にいつも浮かんでいたのは、なぜか和葉の笑顔だった。それでもオレは和葉への思いに蓋をしていた。蘭ちゃんの、工藤の為だと思って……。

そして月日が流れ、蘭ちゃんがもうここと言い出した。

蘭ちゃんが間違いに気付いたから・・・。

オレは大阪府警に就職が決まって、帰つて来る」とになった。

その時は和葉の笑顔に迎えられると思っていた。また昔みたいにオレに笑つてくれると思っていた。でも和葉は笑顔を失つていた。

オレの判断のせいで蘭ちゃんに間違つた道を歩ませ、和葉から笑顔を奪つてしまつた。

「ほんま、なにやつてんねん・・・・。」

今日和葉が笑つてくれて嬉しかつたことが思い出せないくらい、平次の心は日が沈んだ空と同じように暗くなつていつた。

「「」ほー」ほ・・・。まさか熱まで出るとはな・・・。」

「熱出した時に男しか見舞いに来ないなんて寂しい奴だな？服部。」

川口さんはバカにしたよつに・・・いや、バカにして笑つた。

「川口さんみたいにあつちもこつちも女に手出してないですから。」

「口は元気じやねえか？服部？それと、俺は一途だ！俺はな・・・。俺のことはいいから。昨日例のあの子とデートだつたんだろう？なん

で熱出すほど雨に打たれてんだよ？彼女は大丈夫なのか？」

「別に・・・。和葉は家まで送つて行つたし、大丈夫やと・・・。」

「家まで送つて傘借りて無いってことは家で何かあつたんだ？オレで良ければ話聞くぜ？」

言おうか躊躇つていたが、平次は話し出した。

「・・・・・オレ、昨日和葉とキスしたんです。そしたら止まらなくなつてしまつて・・・。そのまま続けてたら和葉が震えてるのに気がついて・・・。それで」

「ちよつと待て。お前彼女は自分と付き合つ氣が全然ないとか言ってたよな？なんでキスしてんだよ？」

「濡れた服で抱きつかれて、平次も・・・なんて言われたらもう我慢出来んでしょ。」

「え？ いつの間に進展してんだよ。俺は聞いてないぞ！」

「言いませんよ！それに、オレも急に抱きつかれてびっくりしたんです。前は手に触れただけでも嫌がられてましたから・・・。」

「お前、苦労してんだな・・・。それで？」

「顔見たら怯えてたんで止めたんですけど……なんで止めるん？つて泣かれて……。それで……お前がそんな顔するからって怒鳴つてしまもて……。」

「なんで怒鳴るんだよ。彼女はお前にして欲しいって言つてるようなんもんじゃねえか。」

「でもあんな怯えた目で見られたら、手も出せないですよ……。」「服部……。そうだ！俺なんか服部が食えそうなもの買って来るよ。」

「いいですよ。薬持つて来てくれただけで、十分です。」

「まあまあ、遠慮すんなつて！」

川口はこいつそり平次の携帯を持って出て行つた。

平次の部屋から出た川口は早速持ち出した平次の携帯を使った。

「確か和葉つて言つてたよな・・・。ん? 遠山和葉・・・?」

和葉の番号を見つけ、発信。

『もしもし? 和葉ちゃん? 僕、服部の上司の川口です。』

『えつと・・・川口さん? 平次になんかあつたんですか?』

『実はアイツ熱出してさ。和葉ちゃんお見舞いに来てくれない?』

『えつと・・・。』

『もう和葉ちゃん家まで迎えに来たから、準備して出て来てくれる

?』

『えつ?』

和葉が窓から外を見ると家の前に電話をしている男が立っていた。

『じゃあ待ってるから』

少しすると和葉が出てきた。

「あの・・・」

「川口です。よろしくね。じゃあ服部の家、行こうか。車大丈夫?」

「はい・・・。」

川口の車に乗つて、平次の部屋に向かつた。

「まさか服部の想い人が遠山さんの娘さんだったなんて。」

「あっ、それで家……。」

「そうだよ？電話は服部のから勝手にだけど……。」

平次の部屋に入ると平次は寝ていた。

「じゃあ俺帰るから、あとよろしくね？」

「帰っちゃうんですか？」

「俺いない方がいいでしょ？じゃあね。」

「ううううう……平次の部屋に来てしました。」

平次の腰に触ると凄く熱かつた。

「冷えピタ・・・。あつた。」

額の汗を拭いて、冷却シートを張る。そしたら平次が目を覚ました。

かすは?

て  
・  
・  
・  
。  
」

平次が和葉に手を伸ばした。

「ん？・・・薬？」

一  
ちやう  
和葉

和葉の腕を引いて、抱き寄せた。和葉が平次に覆いかぶさるかたちになる。

平次が近すぎて、心臓がうるさい。

「ちよつ／＼・・・・離して。」

「……………好き……………。」  
和葉　スレのこと好きやない?」

好きってたつた二文字、口にしだだけなのに、泣きそうになつた。

「オレも・・・・・。」

平次に体を起こされて、平次も起きた。ほっとしたのも束の間、今度は平次がアタシに覆いかぶさってきた。

「昨日の続き、していい?」

「平次、熱ある・・・。」

「人にうつした方が早よ治るから。」

「でも・・・・。」

「オレのこと恐いか?」

和葉は首を横に振った。平次は優しく笑つて、キスをした。

平次の身体は熱のせいで凄く熱かつた。

「へえじ・・・めっちゃ・・・あつい・・・。

「うん。和葉の身体も熱なつとるで。」

頭の中は平次でいっぱい、他のこと考える隙なんかなかつた・・・。

「和葉・・・愛してんと・・・。」

それはきつと、平次が何度も好きつて、愛してるつて言つてくれた  
から・・・。

昨日は何も言われずにされたから、恐かつたこと思ひ出してしまつ  
たんかも・・・。

「アタシ・・・も、すき・・・。」

アタシが好きつて言つと平次が嬉しそうに笑うから・・・。凄い幸せ  
だと思つた。

きつとアタシは、ずっと平次が好きやつた。

平次にバイバイと言つた日も、あの人には好きやと言つた日も、あの  
出来事があつた日も、平次が帰つて来た日も・・・。  
ずっとアタシの中に居つたんは平次だけやつた。

だからアタシはほんとの意味で、平次にバイバイと言わなくちゃいけない日が来るなんて、思わなかつた・・・。

それはあの人があれをやつた。

### 37 (前書き)

あの人と再会する数年後の前に、蘭のお話。

新一のお母さんに呼ばれて、新一の家に来た。

「急に呼んじやつて」「めんね？」

「いえ、何があつたんですか？」

「新ちゃんの部屋をね、片付けてたの。そしたら鍵が掛かっていて、開かない引き出しがあつたの。」

「鍵・・・?」

「うん。だから、気になつて」「じ開けたの。そつしたら、新一の気持ちが入つてたの。」

「新一の気持ち?」

「中身はこれよ。全部蘭ちゃんとの思い出。あと、これは蘭ちゃんへの手紙。」

渡された封筒を開けてみた。中には手紙が一枚。

「蘭へ

こんな遺書みたいな形で告白なんかしたくないけど、オレの気持ちを書くな。

オレは蘭が好きだ。この世界の誰よりも好きだ。

生きて帰つて来れたら、蘭に自分の口で言いたいことがある。

聞いてくれるか?

でももし、帰れなかつたら、蘭はオレの事は想わずに、誰かと幸せになつてほしい。

オレの願いは、蘭が一番に幸せになることだから。蘭、愛します。

新一

わたしは読み終えると涙が溢れて止まらなかつた。

「新一は、蘭ちゃんを誰よりも想つてゐるよ。ほんとは自分が蘭ちゃんを幸せにしたかつたのね。」

「わたし・・・わたし・・・・・。」

わたし、新一が好きだつた。誰よりも、愛してた。

今になつてそんなことを思い出すなんて・・・。

馬鹿だ・・・。わたしは自分の「とばつかりで・・・。

ねえ新一、馬鹿だつて言つてよ。またわたしに笑つて?

こんなにも大好きだつた人を忘れてしまうなんて、取り返しのつかない事をしてしまはんて・・・。

それでもわたしは新一の願いを叶えたい。

わたし、幸せになつてもいいですか?

アタシは平次が熱を出した次の日から、頑張つて一人で出掛けたりしていた。

男の人とも話せるようになつたし、バイトも始めた。  
バイトは家の近くのファミレス。店長さんが女性でアタシの事情を察してくれた。

だから初めは少しずつやつたけど、昔のアタシに戻りつつあった。

「和葉ちゃん、お密さん来てるよ！」  
「はい・・・？」

言われたテーブルにメニューを持つていくと、大好きな人が来ていた。

「よう・・・。」  
「平次／＼・・・・仕事中？」  
「ああ、さつきおつきい事件片付いたから、ちょお時間出来てな。」  
「それで、来てくれたんや／＼」  
「別に・・・お前がちゃんと働けどうか見に来たっただけや・・・」  
／＼  
「ありがとう／＼」

平次はたまにお店に来てくれていた。

アタシは嬉しくてにやけてるうじく、直ぐに平次が彼氏だと認じられてしまった。

それから、平次にプロポーズされた。

元々平次とは一緒に暮らしてたけど、結婚は願望だけで、まさかプロポーズしてくれるなんて思わなかつた。でも凄い嬉しかつた。

それから、お互いの両親に挨拶をして、籍を入れるのはアタシの誕生日になつた。

何もかもが順調に思えて、幸せの絶頂に居る気がしていた。

あの人と再会するまでは・・・。

今日も普通に働いていた。お密さんの数もいつもと変わらなかつた。

その時、アタシはお密さんが帰つた後のテーブルを片付けていた。

「 こらつしゃ いませ。 」

お密さんが来たから入口の方を向いた。そしたら、あの人気が居た。

ガシャーン

アタシはあの人を見た瞬間に手が震えて、持つていた食器を落としてしまつた。

「 和葉ちゃん！？ 大丈夫？」

「 ごめんなさい！」

アタシはその場に、あの人から隠れるよつにしゃがみ込んだ・・・。

「 これ片付けたら、奥で休んでて・・・。」

「 はい・・・・。」

どうして・・・？あの人気が居るん？どうして、お店に？アタシつてばれたかな？どうしよう、恐い・・・。

アタシは恐怖で訳が分からなくなつた。

ガラスで切つたとこを手当してもうつと、今日は帰るよつに言わ

れた。

「平次・・・・。」

でも平次には気付かれないようになせな・・・。

家に帰つて来ても、落ち着けなかつた。  
一人の部屋が恐い。あの時の感じが蘇つてくる……。  
誰か助けて……。

「平次……。」

「なんや?」

「へつ?」

あれから何時間たつたんやろ? 気がついたら外も暗くなつてて、平次が仕事から帰つて来てた。

「何驚いてんねん? ……ただいま。」

「おかえり……。」

平次が帰つて来てもた……。平次がおつたら安心やけど……。

「和葉? どした? 元気無いけど?」

「……今日ちょっとミスして……お皿割つてもた……。」

「怪我わ?」

「ちょっと切つたけど大したことないよ。」

「見せてみ?」

「大丈夫やつて……。」

「ええから、見せる。」

「うん……。」

傷口を平次に見せた。

「そんなに深くはないな。よかつた。でもあまり落ち込むなよ？」  
誰でも失敗することははあるからな？」

「うん・・・。ありがとう・・・。」

「じゃあ今日はオレが飯作るわ。」

「いいよ。アタシがするよ！平次疲れてるやつ？」

「じゃあ一人ですか？」

「うん！」

平次は優しいから、これ以上心配かけれん。

それに、もうあの人には会うこともないやろ・・・。  
もう、大丈夫や・・・。

翌日、アタシはバイトに向かつた。

「和葉ちゃん、怪我は大丈夫?」

「はい。迷惑かけてすみませんでした。」

「ううん。」

もうあの人は来ないって、アタシは安心してた。  
実際にあの人はお店には来なかつた。  
でも中に入つて来なかつただけで、バイトの後、待ち伏せされていた。

「和葉、久しぶり?」

逃げよつとしとるのに、足が震えて動けん・・・。

「見ない間に綺麗になつたね?男でも出来た?」

恐い・・・誰か来て・・・。

「そんなに怯えなくてもいいのに。」

嫌・・・触らんとつて・・・。

「男なんかできる訳ないよな?もし出来てたら、おれがしたことその男に話してやるよ。」

なんで・・・そんな」と・・・?

「じゃあ、また来るよ?和葉。」

アタシはその場で動けなくなってしまった。

「和葉ちゃん?どうしたの?」

「店長さん・・・。」

「大丈夫?」

店長さんが家まで送つてくれた。

「和葉ちゃん、明日はバイト休みにしてくから。ゆっくり休みなね?  
?」

「はい・・・。」

平次・・・早く帰つて来て・・・。

一人の時間が不安で、恐くて仕方なかつた。

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

誰・・・まさか、あの人・・・?

恐る恐る携帯を見ると、平次と表示されていた。

「もしもし?」

『和葉か?今日帰れんくなつたから・・・。』

「そつか・・・。分かつた・・・。」

『和葉？何かあつた？』

「えつ？何もないよ・・・。」

『そうか。じやあまたな。』

平次・・・・平次、帰つて来てよ・・・。

「初めての恋が終わる時」 読んでくださった方、ほんとにいつもありがとうございます」といいました。

この小説は「」で終わりです。

凄く中途半端で「」みんなさー。

もし、続きが気になりましたら「初恋終時・改」を「」覗ください。

「初めての恋が終わる時」と「初恋終時・改」はほとんどの金額同じ内容です。

変なところを直したつもりで、書きなおしています。

他の小説も書きなおしていくので、よかつたら「」覗ください。

ゆっくりになるかもしれません、必ず完結させますので、お付き合いください。

なんでこんなことしてるの? と懶つかもしれませんが、ただの気まぐれです。

ですが、今度はちゃんと完結させます。

200文字つて結構書くの大変ですね・・・(・・・)

もつねるそりかな?・・・(・・・)

でわ、今まで読んでくれた方、ありがとうございました。そして、ごめんなさいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0026u/>

---

初めての恋が終わる時

2011年11月27日18時45分発行